

飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

第 286 回 「大丈夫」という言葉の有難さ

2008.11.23

金融市場の崩壊、株価が下落し、円高基調に安定し輸出が伸び悩む。アメリカの民主党は「チェンジ、チェンジ」を繰り返し、日本の民主党は、相変わらず政権与党の批判を繰り返している。確かに政府の経済対策の遅れから、アドバランを上げてはみたが実施に至らぬイライラは、中小企業を中心に着実に「貸し渋り」が進行し、年末年始を控え、不安だらけの中での日常生活を強いられている。混沌とした世の中で、今一番必要なのは、精神的にこの「不安感」を払拭する事だと思うのだが...

いつもながらだが、テレビや週刊誌のマスコミは、不安感を煽るのが使命だと思い込んでいる。体制を批判するのがマスコミや評論家の役割だとする論理は、一部にあらう。しかしむやみやたらと「大変だ、大変だ」と大騒ぎすることで、注目度をアップさせるやり方は、いかにも「品」がない。最近の報道を鵜呑みにすれば...、世界中の経済は壊滅し、アメリカは奈落の底へ、日本も、今にでも破綻しそうな様相を呈している。まるで、「ハルマゲドン」(ヨハネの黙示録)である。

もう一度言ってしまう。

大袈裟に恐怖心を撒き散らし、心配と懸念、危惧感と心細さを植えつけ、自らの存在をアピールするやり方は、テクニクの一つかもしれないが、小生、鳥肌が立つほど、嫌いである。

好き嫌いで言わせてもらえば、「占い師」「テレビの台風の実況中継」「万年野党の党首談話」「健康診断の結果のレポート」...いずれも「大丈夫です」「安心しなさい」とは言ってくれない。

「人のおせっかいばかりしていないで、自分の事をしっかりやりなさい」確か、昔そんなことをしつけられた記憶があるが、「占い師」は相談するたびに、心配事を植えつけていく。テレビの台風の実況中継、傘が壊れ、目をまともにも開けていられない、眉目麗しい女子アナが可哀想で仕方がない。でも、一体、こんなとき誰があんな場所に行くのだろうか？万年野党の党首は、与党を批判することが仕事だと思い込んでいる。それが国会議員の役割で、民主主義のバランスだと思っている。そう、だから万年野党なのだ。健康診断の結果、ボーダーラインにあるデータは、間違いなく「再検査」。万が一を期しての「やさしさ」なのかもしれないが、レポート片手に、みんな暗い顔して下向いている。胸騒ぎ、憂いと不安心が満ち満ちた光景が、健康診断の後には必ず見受けられる。

いやはや、天邪鬼の独り言と、一笑に付していただきたい。

とにかく、今、誰も、「大丈夫です」「安心しなさい」とは言ってくれない。「大丈夫」という確信が持てないし、言ったとたんに責任が出てくる。患者や遺族もPTAも、クライアントも従業員すら、下手すると「訴えるぞ！」という時代になった。だから誰も「大丈夫」とは言わなくなった。

不安感を押し付け、「だから言った通りじゃないか...」と責任転嫁することに、慣れきってしまった世の中、不安が懸念と危惧から恐怖感にまで成長し、ストレスを抱えながら精神的に安定しない「さまよえる日本人」が、いかに多くなったことが、

ひょっとして、いかに高価な薬より、彼らに一番効果があるのは、「大丈夫です」「安心しなさい」という言葉かもしれない。「大丈夫」という言葉の有難さを、今改めて、考えてみたい。